武田麟太郎
島木健作集
織田作之助

日本文学全集　44

日本文学全集44　武田麟太郎　島木健作　織田作之助　集

昭和四十五年十一月一日発行

著　者　武田麟太郎　島木健作　織田作之助

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版　株式会社精興社
本文印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所

武田麟太郎集　目次

暴　力　五
反逆の呂律　一元
日本三文オペラ　二五
釜ケ崎　二〇
市井事　六七
一の酉　八二
現代詩　八六
朝の草　一〇六
大凶の籤　一一八

島木健作集　目次

生活の探求　一三五
癩　二八〇
黒猫　三一二
赤蛙　三二八
ジガ蜂　三三四

織田作之助集　目次

夫婦善哉　三三
木の都　三五
螢　三六
六白金星　三七
アド・バルーン　三九
世相　四一
競馬　四四
年譜　四六
人と文学　小松伸六　四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

武田麟太郎集

一仏天布
不私必恭

武田麟太郎

暴　力

1　白い手

家畜が列んでゐる。獣医は一匹づつ叮嚀に検査した。食用に差しつかへのないのには、ベタベタと紫の判を押した。——今、青年たちは、その家畜のやうに裸体で押し列んでゐた。彼らも検査されるのだ。カーキ色で平腰の軍人が一人づつを叮嚀に調べあげた。そして、彼らの役に立つのには、合格の判をベタリと押した。

杉平治も二十一歳になつてゐた。強制的に彼も亦この検査場に連れて来られた。

「何と云ふ身体だ——不忠者め」

軍医はピンとはねた髭をしかめて呶鳴つた。そしてパチパチと薄い平治の胸を叩き、白い細い腕をねぢあげた。この身体は明かに用には立たない。平治は助かつた。

それから永い間、検査場の板の間に起立したまま、青年たちは待たされた、午後一時になつて、将校が訓示をはじめた。

それはアメリカの軍備についてであつた。ロシアでは共産主義が不可能なので、資本主義制度に立ちかへつた、とその肩章をキラキラさせた男は云つた。日本でも一旦緩急がある場合にはバスはすべて陸軍の手に収められ、改正された軍用道路の上を駆けることができる、と彼は威張つた。「都市計画にはそんな重要な意味がふくまれてゐるのを忘れてはいけない」——彼は明かに開戦について語つたのだ。

この演説の間に平治は背中に強い視線を受けてゐるのを感じた。ふりむく。すると、髪の長い、太い眼鏡をかけた、青年がゐた。彼は猛々しい脂の浮いた顔をしてゐた。ぢつと見つめるとその容貌の中から、中等の初年級の時、同じ組だつた三好の稚い顔が浮び出て来た。彼は大へん変化してゐる。

帰途、三好は平治を喫茶店につれて行つた。そして盛に煙草を吸ひ、激しい口調で、彼の最近について語り出した。それは東京に於ける彼や仲間の生活であつた。彼は支配者に対する反抗について云つた。一切の政治権力の悪について語つた。労働者の暴力について云つた。

きいてゐるうちに、平治は飛びかかつて来る恐しい黒い機関車のやうなものを感じた。それらの新しい言葉は彼を圧倒した。そして永い間忘れてゐた激情の思ひ出が彼の胸に帰つて来た。幼年時代に彼が好いた伝奇小説の中に「魯国虚無党員」といふ言葉を見出した。彼はこれにある異様な心のときめきをおぼえた。又、ある日の新聞に、その頃高名な無政府主義者が情婦に刺された記事が載つた。

「社会主義者――氏」と書かれてあつた。彼には「社会主義者」の意味を理解することはできなかつた。だが、その文字は烈しく彼を魅惑した。――今、それらの記憶が帰つて来たのだ。

「うむ」と彼は云つた。

三好はつづけて、こちらで捕縛されてゐる彼の同志たちに差し入れをしなければならないと云つた。その同志たちは、将軍を屠殺しようとしたのだ。

「屠殺！」

平治は繁栄する大通りの裏にある自家に帰つて来た。家の中は暗かつた。そして坊主は昼寝をしてゐた。この坊主は死人の絶え間なかつた杉の家の、仏守りとして、寺からやつて来てゐたのだ。彼は平治の嬰児の時代にやつて来た。そして、何時の間にか家の総支配権を握つてゐた。彼は仲介者になつて総本山の方へ毎年多額の寄進をさせられた。そのために僅かの財産も次第に残り少くなる。総本山の法主の豪奢な放蕩は新聞記事を賑してゐた。杉はこの法主を極端に憎んだ。だが杉の祖母は「極楽に行ける」と楽しんでゐた。その祖母は奥の間で年中蒲団の中にゐる。彼女の身体はもう動かなかつた。やがて彼女も死ぬにちがひない。すると杉の家では平治だけが残るのだ。

平治は殺伐な顔をして、仏壇の列んでゐる部屋を通つて、奥の間に来た。老婆は彼が兵隊にとられなかつたことを聞き、「やれ、やれ」と悦んだ。

東京へ去つた三好からは、毎月彼らの定期刊行物を送つて来た。平治はその薄い雑誌の理論については考へるよりも感じることができた。

彼の今まで知らなかつた世界についての興味が起つた。彼は時々遠くの工場街へ出かけて行つた。彼はそこで「労働者」に逢へるだらうと考へた。だが、何時も工場は大きな灰色の壁で包まれてゐた。彼の視線は内部までとどかなかつた。煙は太く地にまで下りて来て彼の鼻を痛めた。大工場の入口にある交番では若い巡査が、風呂帰りの近所のアイマイ屋の女と冗談を云つては、野卑に笑つてゐた。どこもここも殺風景だ。街角に小さな写真屋がある。彼は近づいてガラスの飾窓を覗きこんだ。五人の女給姿の写真があつた。そのうちの一人はエプロンの上に、三好が送つてくれる無政府主義の雑誌をのせてゐた。その横にある鉄工組合の争議記念の大きな写真がある。だが、それらの労働者の顔は、平治の想像の丁度反対であつた。彼は失望した。何と云ふ精気のない！　何といふ鈍感さうな！

それから夏が来た。祖母は次第に衰弱した。彼は老人が死ぬことには少しの憐みも持つことはできなかつた。醜い彼らの姿が消えて了ふ方が、世界は少しでも美しく見えるだらう。――老婆は大袈裟に苦痛を訴へた。平治はそれをきいてゐると海へ行きたくなつた。

そして海へ来た。海は広くて、光に満ちてゐた。男女の

皮膚も生々としてゐた。彼は泳げない。だが脱衣するために、葭簀張りの中にはいつた。そこで衣類を預つてくれるのだ。彼はキモノを取りながら、番人を見た。番人は少女であつた。少女は男のやうにタオルを首に捲き、ハモニカを吹いてゐた。頬と円い肩とは栗色に焼けてゐる。眼はつりあがり、白眼がちだ。

彼は海に出て、冷い水の中で、その少女について考へた。それから濡れて光る身体のまま、砂にはらばつて葭簀の中を覗つた。少女はキモノ籠を整理しながら、彼を睨んだ。その大きな眼は極めて非女性的であつた。平治は「これは美しい」と思つた。

畑の真中に高いコンクリートの塀が聳えめぐらされてゐた。その周囲は五町もあるだらう。その塀の中に監獄があつた。外界から遮断された中では、腰に鎖をつけた囚人が働いてゐた。しかし表からは静寂だけしか見られなかつた。

夜、月が昇り、その灰色の塀は一層巨大に、怪しく見えた。それに沿つて少女が走つた。平治が追ひかける。遊戯だ。少女は逃れて土手に来た。土手の下には川が流れて音を立てゐた。上には長々と鉄橋がかかつてゐる。夏草の中に少女は倒れた。息切れをしながら平治が飛びこんで来た。突然、明るい窓を持つた列車が、鉄橋の上を音を立てて走つた。

その夜晩く、平治はしみこんだ草の香に、鼻をクンクン云はせて帰つて来た。すると老婆は死んでゐた。

坊主と平治とが暗い家に残つた。二人は共に生活することはできないだらう。二人は毎日睨みあつた。だが、この暗い家も潰れる時が来た。都市計画の地図で、ここは大きな道路に指定されたのだ。——こんな家は早くつぶされた方がよい！

立退きの代償として若干の貨幣が貰へることになつた。坊主はそれを区役所に受取りに行つた。そしてその金を持つたまま、遁走した。これは愉快な解決であつた。平治はのびのびとして、家財を売り始めた。

少女は海水浴場が秋になつたので、自分の家に帰つて来た。彼女はそこでセツ子と呼ばれてゐた。家には義父と親戚の男とがゐた。どちらも大工だ。その親戚の男と彼女とは結婚することになつてゐたのだ。

「あんたは私がその七造さんと一緒になつても構はないの」と少女は云つた。

どうしていけないのか。平治はこれは普通の愛ではないと思つた。彼女を愛すると云ふのは、こんな風ではいけないのか。——彼には動物的な愛情は感じることができた。だが、それ以上のものはなかつた。

少女はタイピストになつたと云つた。彼は彼女がつとめてゐるビルディングに出かけて行つた。すると、彼女はエレヂエターの運転をしてゐた。

「どちらも指を使ふ職業ですわ」と気取つて東京語を使つ

た。そして、彼らは六階の間を往復して、しやべりつづけた。

冬から春が来た。たうとう古い家を立退く期限が来た。平治はこのまま東京へ行つて了はうと考へた。そして、セツ子には黙つて出掛けることにした。彼女は大袈裟に自分を悲劇の主人公にして芝居じみて泣くだらう——そのことは堪へられなかつたから。

悪いことに、その朝、セツ子は笑ひながらやつて来た。彼は口も利かずに家を出た。道路になつて了ふこの生れた家を出た。停車場はこの都会の北の端にある。彼はそこまで歩いて行かうと考へた。そして歩いて行つた。すると、少女は口笛を吹きながら、彼の先になつたり、後になつたりしてついて来た。途中で、風は雨に変つた。最初の雨滴がセツ子の髪の毛の上に落ちた。さし延ばした平治の掌の上に、つづいて図太く雨は降り出した。彼は少しく考へてゐたが、乗物にも乗らずに、どんどん歩いて行つた。少女も草履をペタペタ云はせて、ズブ濡れになつてついて来た。停車場へ来た。その中は人いきれでムツとしてゐた。短銃をさげた憲兵が人々を睨み廻す。平治は人々と荷物の間を通つて切符を買つた。

「あんた、どこへ行くの」

セツ子はキヨトンとして訊ねた。平治は切符を見せた。彼女はそれを見ると、赤くなつた。「あんた!」と云つて彼の顔を見た。それから悲しさうな顔に変つた。

彼は改札口の方へ行つた。セツ子は駈けて行き、切符を買つた。だが、彼女には見送りの入場券しか買へない。

歩廊の中まで雨は横に降りこんで来た。汽車は来た。彼は乗込む前に少女を見た。セツ子はぐつと口を食ひしばつて低い声で云つた。

「あんたは、たうとう私を捨てたのね」

捨てる? 平治は何か云はうとした。だが、その前に手がポケットの中の貨幣のいくらかを摑んだ。とつさに、彼はそれを彼女に突き出した。

「傘でも買つて帰れ」

そして乗り込んだ。こんでゐた。歩廊の反対側に席を見つけた。前には朝鮮人がゐて、キヨロキヨロしてゐた。窓の外では、セツ子は銀貨を手にしたまま、ぼんやりしてゐた。やがて発車した。彼女の大きく見開かれた眼が去り、長い歩廊を出ると、車室はパツと明るくなつた。

2 東京の埃

首府は乾燥してゐた。そのために、トラックの車輪や、自動車の警笛や、人間の叫び声が少しの調和もなくぶつかりあひ、空に撥ねかへつて、人々にトゲトゲしい、焦立たしい心を起させた。空は灰色に塗りこめられ、土地には風が吹いて、砂塵が烈しく立つた。建築中の建物は裸の骨骼をさらし道には穴が掘られ、シャベルだけが見えて泥砂を

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

くみ出した。――平治はその中に立つた。どこへ行かうか。目的はなかつた。

高いビルディングとビルディングとの間を、小さい彼が歩いた。埃が眼を痛めた。涙をハンカチで拭いた。そして眼を開くと王宮が彼の前にひかへてゐた。だが、それは近いやうに見えてなかなか遠いところにあるのだ。突然彼の前を憲兵がオートバイで走つた。眼を転じると、一隊の兵士が城の周囲を行進してゐた。――平治はクルリと踵をかへした。ガードの下を通り、電車通りに沿つた。どこへ行けばよいか。

彼は雑誌店に飛びこんだ。三好の関係してゐた雑誌の発行所を調べて、そこへ彼を訪ねて行かうと思つたのだ。東京の中で唯一人の知人だ。多くの雑誌が彩色されて列んでゐた。そのうちに被支配階級の主張を公然と掲げてゐる雑誌は片隅にかためられてあつた。だが、そのうちに三好らの雑誌は発見できなかつた。

「あれは最近は出てゐません」

店員は無愛想に云つた。遂に古本屋の店さきで、三好の住所が分つた。その時はもう夜になつてゐた。

奥路地の中をはいつて行つた。あんまやがあり、駄菓子屋があり、ひつこし手伝屋があり、多人数の家族がやかましく食事をしてゐる家があつた。共同水道の前の二階家が三好のゐるはずの――社だ。その古い木札がマッチの先に現れた。すると、彼はグイと肩を摑まれた。振り向くと一人の背広が、彼の顔にすれすれに顔を持つて来た。

「きみはどこへ行くのです」

「ここへ来たのです」

「何の用だ！」

「どうして、そんなことをきかねばならないんだ」

「いや、職務ですので――おききして、如何しようと云ふのではありませんが」

「名刺はありますか」

「これです」

「ぼくは三好と云ふ友人をここへ訪ねて来たのです」

「三好さん？　三好さんて方はおいでにならないでせう」

「そんなはずはない」

平治は格子戸をあけた。すると二階から大急ぎで男が下りて来た。破れ障子を開くと、それは小さい、もう可成年とつた人だつた。彼も亦、五六ケ月前から三好はゐないことを告げた。

「どうしたのです――どこにゐるか分りませんか」

男は暫く平治を観察してゐた。平治は遠くから、わざわざ彼を訪ねて来たのだと云つた。

「ぢや、とにかく上んなさい」

疲れた平治は二階へ通つた。あがりきつたところに「死を恐れざる者に恐怖せよ！」といふ貼紙がしてあつた。彼はそれに頭をぶつつけさうになつた。クロポトキンの像や、虐殺された彼らの首領の写真があつた。粗末な机と椅子。

「三好君は元気のいい人でしたが、女ができてからすつかり影をひそめて了ひました。恋愛の方が革命よりも力強いのかも知れませんな」

そして男は柔和に眼を細めて笑つた。平治は無感覚にそれをきいてゐた。疲れてゐる。

「大へんあつかましいのですが、今夜ここへとめてくれませんか。宿屋へ行けさうもないので」

男は再び彼を観察して考へてゐた。

「いいでせう。雑魚寝しかできませんよ」

脂で冷く、じめじめした固い蒲団に身を横へた。そしてやがて眠つた。眠つて幾時間か経つて、太い男の声や、ガヤガヤした足音を彼はきいた。「誰だ、誰だ」と云ふ声もする。そして彼の蒲団の中にも大きい男がはいつて来た。だが平治は身動きもしないで眼をつぶつてゐた。

朝は早く起きた。戸を閉めないので、汚い部屋の中は白つぽい光が溢れてゐた。彼は頭を動かして男たちを眺めだした。男たちは、蒲団を頭からかぶつてゐたり、歯を軋ませたり、「よし」とか「何を！」とか寝言を云つてゐた。一つの寝床だけが蟬の脱殻のやうに空になつてゐて、枕もとには泥だらけの脚絆が置いてあつた。——平治の横に這入つて来た肥つた男は口を薄くあけて、脂で赤い顔をしてゐた。そして平治が立ちあがると、寒さうに蒲団は全部自分の身体に捲きこんで了つた。

肥つた森田が歩いて、小さい平治はそのあとについて行つた。廻転扉が廻転する。制帽をきたビルディングの守衛がジロリと二人の風采を見た。肥えた森田は立ちどまつて、彼のつれを待つた。エレヂエターが下りて来た。それに乗るのだ。「三階」三階では森田はしばらくキヨロキヨロしてゐた。だがすぐに目的の会社のガラス戸の金文字が眼にはいつた。

「ここだ！」

平治は「揺」の実地見学に来た。教はつた通りにやるのだ。

「庶務課長さんはおいでせうか」

給仕は案内した。

森田は深々とした椅子に腰を下し、縁の革を撫でまはした。平治は暫く額になつたキリストを見てゐた。首の太い人物が軽く現はれた。いそがし気に「さあ」と椅子をすすめた。平治は白々しく切りだした。バットの箱にでたらめの名を書いたのを名刺としてさしだした。

「実は——社のかういふ者です。以後、御ヂツコンにお願ひします。——今は浪人してゐるので何分の御扶助を願ひたいのです」

いちど課長の姿は消え、状袋を手にして再び這入つて来た。状袋は平治に手渡された。すると突然、森田は横からそれを奪つて、バリバリと封を切つた。そして、中をあらためると、彼は立ちあがつた。

彼らはそれで酒を飲んだ。平治は酒に弱かつた。昼間から飲んだので、彼は醜く真赤になつて凋れた。

「森田さん、ぼくは飯を食ふ」

「杉君、きみはなかなか度胸がある」

そして、彼は目をきめて「出す」会社や、五十円包みをくれる喜劇俳優や、どんなのが行つても、「必ず大丈夫」な火葬場の事務所のはなしをしだした。そして、女給に酒を命じた。平治はまづい食物を半分でよして、肘でその皿を押してやつた。そして、三十五、六すぎの森田の顔を見てゐた。その子供じみた顔を見てゐると次第に憂鬱になつた。

「なあに、奴らの金をいくら揺つてもいいのだ。奴らア我我の兄弟の血と油とを絞つてるのだ！　可哀さうな兄弟の代りに揺つたつて何の不思議がある！」

そして、その「兄弟たち」はどこにゐるのだ。ここではレコードは廻転し、薄化粧した学生の一団とスカートの短い桃色の円い顔をした少女とが笑つてゐた。

「出ませう！」

「まあ、ゆつくりし給へ。もう一杯」

出た時はすつかり夜になつてゐた。電燈がキラキラと美しい。夜はこの通りに人々を押し出した。彼らは別に用はなかつた。だが、男と女とは腕を組んで濶歩し、独身ものは振りかへり振りかへり歩いた。店毎に置かれてあるラヂオの拡声器が一斉に「世界の中心としての日本」と云ふ演説をはじめた。森田はそれを一軒一軒「フム、フム」と云つて聴いて廻つた。そして四つ角に来ると、立ちどまつて「待てよ！」と云つて財布を調べた。

「これは足りない！　行けないぞ！　せつかくきみを案内しようと計画してゐたのに――」

平治はその意味を察した。

「ぢや、ぼくは一足先へ帰りませう。あなただけ行つていらつしやい」

森田は円タクの中からステッキをあげて「やあ失敬！」とどなつた。それから車は走つて行つて了つた。平治は――社の方へ帰つて来た。

そこは学生町の通りに繋つてゐた。明るい街や通りや人ごみは何故誘惑するのか。無意識のうちに平治は大学寄りの寂しい通りから電車線路を越えて、露店の賑かに列んだ方へ来てゐた。――そしてその中で彼は立ちどまつて了つた。セツ子がゐるのだ。セツ子が露店で電燈の下で安物の玩具を列べて坐つてゐる。セルロイドの滑稽な人形、赤く塗られた鉄の汽車。少女は平治を烈しく睥んだ。その瞬間セツ子の姿は彼女から消えた。彼女はセツ子よりは少し身体が大きかつた。殊に上向いた時の四角い広い肩が眼立つて大きかつた。粗末な陰気なキモノをきてゐた。眼の下もセツ子よりは黝んでゐた。――だが、こんな酷似は滅多にあるものではない。平治は暫くの間、動揺してゐた。

路地の奥の――社の向ひ側に駄菓子屋があつた。露店の玩具売りはそこの娘であることが発見された。ひるすぎ、平治が――社から出ると、再びセツ子の模型に逢つたのだ。彼女は今起きたばかりの表情をして、表を眺めながら、茶碗を手にしてゐた。そして、ゆつくりと飯を口に運んだ。晴れた日だつたので、平治はつい微笑して了つた。すると少女は茶碗を置いて烈しく彼を睥んだ。その睥みは彼をよろめかした。彼は街へ出た。

街はすでに夏の光に満ちてゐた。号外がやかましく出て金融恐慌の後始末のため、政府は国民の九億円を財閥にくれてやつたことを報じた。共産主義者は血みどろになつて戦つてゐた。彼らはブルジョア議会の解散を要求した。そして示威運動を行はうとして示威運動は蹴ちらされた。小さい工場は腐つた塀のやうにバタリバタリと倒れた。大きい工場では生産を合理化するために、何千人もの労働者を厳重な思想検査のうちに、馘首した。――労働者たちは飢ゑの前に立たされ、不安になつて来た。各所に工場代表会議が開かれた。だが、何故――社の仲間は動かないのだらう。彼らは労働者の自発的な運動も共産主義者の煽動としてとりあげなかつた。真実に労働してゐる無政府主義者はさうでもなかつた。だが、ここに巣くつてゐる無政府主義者たちは今はすつかり大衆から離れて了つてゐた。そして口だけで「政治はダラクだ」と云つて、非実践的なのを、非闘争的なのをゴマカしてゐた。

玩具売りの少女は何故笑はないのか。森田はこれを説明することができた。

少女の兄は小倉服を着て駅夫をしてゐた。専制的な政治権力を自分の階級のために、恣にしてゐた首相が、彼の勢力を誇りながら、東京駅から出発しようとしてゐた。かかる場合もその勢力を誇るのである。そして少女の兄はこの権力に得意満面の男を殺さうとした。傲慢な彼は一言もなく、色を失つた大臣たちの腕の上に倒れた。霜夜であつた。少女の兄は、監獄に繋がれた。そして、一家は笑ひを失つた。

「我々の眼の先に少年テロリストがゐたのだ。彼は我々の知らぬ間に行動した」

森田はその頃からこの社にゐた。この頃は活気のある愉快な時代であつた。殺されたり、死刑になつたり、無期になつてゐる諸先輩はまだここにゐた。森田も亦、危い仕事をして来た。だが今日は？

だが、生活はここではだらだらと流れた。遠いアメリカで魚屋と靴屋が無政府主義者である理由から絞殺された。これは――社に衝動を起した。これに抗議するためにパンフレットを発行した。それから浅草で仲間の全国的な大会があつた。――社からも代表に労働者あがりの秋山が出た。

これらの事件がやつと平穏な流れに抗した石であつた。流れはその石に打つかつて、一時白く泡立ち激した。だが勿論、それは――社の力ではなかつた。現実に戦つてゐる労働者の圧力がここまでやつて来たのだ。

平治は次第に彼を激動させるものを要求しだした。冬近く、彼は仲間の者と、最も精鋭な共産主義者の多く活動してゐる大衆的日常政治行動団体の第二次全国大会に出かけて行つた。それをぶちこはすためだ。彼ら共産主義者たちは労働民衆を踏台にして新しい独裁を、しかも今と同じに支配するものを将来しようとしてゐる、と云ふ意見から。

彼らは出かけた。傍聴席にかたまつて陣をとらうとした。だが、満員のために離れ離れになつて了つた。赤い腕章を捲いた青年労働者が整理した。

開会の直前に窓の下に喊声が起つた。それは紋附羽織を着て白鉢巻をした一隊が、菊水の旗を押し立てて、円タクで襲撃して来たのだ。やはりこの集会をぶちこはすために。

だが、彼らは頑丈な赤色自衛隊のために簡単に追払はれて了つた。その次には会場は、あごひもをかけた警官隊に埋められた。演壇の下に金筋もでしやばつて来た。彼らもやはりこの集会をぶちこはさうとしてゐるのだ。

だが、会衆の一人は単純に一人とは計算できなかつた。一人は何十人何百人の労働者を代表し、その代表が全国から集つて来てゐるのだつた。これらの力は自然と会場に満ちてゐた。かう云ふ会合は眼に立たぬやうにぶちこはされねばならなかつた。官憲はこのことを十分知つてゐた。

「我等の大会を守れ、大胆に、細心に、厳粛に」

会議は白熱して来た。人々の吐くエネルギイが重々しく、爆発する程、会場に満ちた。身動きもならなかつた。平治は傍聴席に挾まつたまま、会議に吸ひとられてゐた。そこでは日常的な細微な闘争についてまで議せられた。この団体にゐる共産主義者のすぐれた手腕が眼立つた。その主義主張、その実際の闘争を通じて、党員はもとより、労働者の信頼を受けてゐる。全国的に、日々、しつこくなされてゐる現在の支配階級への戦争、労働攻勢、力と力の、最後には血と血との戦ひを、平治は二階の傍聴席から縮図的に見下すことができた。

「これは明かに戦つてゐる」

昼飯の休憩が大へんおくれて来た。だが、身動きもできなかつた。彼の横の女工たちは小さい弁当包みを開き、男たちは大きな握飯を食ひはじめた。

「一つどうです」

青海苔で巻いた拳程の握飯を摑んでさし出した。平治はそれを受取つて食つた。中からは真赤な梅干が出て来た。背後の学生は林檎を一つだけ食つて、平気な顔をして議事について、刷物を読んでゐた。

夜にはいつてもまだ会議はつづいた。明日もあるだらう。失敗した平治の仲間たちは何事もなかつたやうな顔で帰つて行つた。

「杉君、東京の方の代議員で大原つて男がゐたのに気がついたか」

森田は云ひだした。それは四角な顔を持ち大きな吼える口を持ち、最も戦闘的に今日の会議で働いた男であつた。その男の印象は誰にも残つてゐた。森田はつづけて云つた。

「あいつは、もと我々の仲間にゐたんだが、ボルにダラクして了ひやがつた。反抗心が徹底してゐて、面白い男だつたが——」

彼がボル（共産主義者）に移つた時、以前の仲間は彼を襲つた。

「裏切者！」二週間もの間、彼は頭には繃帯をし、腕はつるして歩いた。だが、彼は「ボル」の団体でよく働いた。彼は以前の仲間には裏切つた。だが、彼の階級には裏切られなかつたのではないか。——森田の言葉にはどことなく、そんな意味がふくまれてゐた。

「俺も、もう一度、あいつらの中で働くかな」

北海道から来てゐた労働者上りの秋山が云つた。「すると、きみたちは俺を足腰の立たぬ程やつつけるか」

誰も答へなかつた。肥えた森田だけが、昔の活潑であつた「無政府主義者」の思ひ出と共に、かなしい感慨をした。

秋山は以前は「ボル系」であつた。彼は雪の北海道で「政治はダラク」であることを、身を以て経験して来た。だが、彼は政治行動と云ふ意味を議会行動とまちがへてゐたのだ。彼はそこで三週間、不眠で働いた。それは同地方の政治的な先駆者を道会議員に立てるためであつた。中央から共産主義者が煽動のために潜んでやつて来た。植民地の荒くれ男たちは、「ストライキ」と云ふものに、血を燃した。各所にそれが勃発した。そして、その勢で彼らの候補者は当選した。

当選した翌日にはもうブルジョア政党から「懇談」に来たり、その政党の正二位の首領から親展書が来たりした。買収だ。——地位と金と女とが当選者の前にぶらぶら動いた。彼はその動く餌に知らず知らず首を動かした。

秋山は応接室の敷物の上に、疲れの為にころがつて、下から新議員の顔を見てゐた。新議員は椅子の上で腕を組んでゐた。彼らは数時間、そんな風に睨みあつてゐた。遂に秋山は叫んだ。

「党支部大会を臨時に開かう！」

そこで、議員の全部の行動は支部統制委員会の下に置かるべきであることを、厳格に決定しようと、秋山は考へた。だが金銭の力は大きい。新議員は策動した。そしてその臨時大会には突如として「一定の政治的意見の拒否」案が上程された。意味するところは共産主義者排撃——秋山の一派排撃であつた。秋山は戦つた。だが労働者の団結の力のまだ十分にない時代であつた。殊に北海道だ。秋山は負けた。すると同時に彼の情婦が継母のために昇汞水をのまされて死んだ。彼はよろよろした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com